

スポーツ大会の組織運営について教える体育

神 谷 拓

1. 研究の背景と目的
2. 研究方法
3. モーモーカップ 2009
4. 次年度へのアドバイス
5. 総 括

1. 研究の背景と目的

本稿は、学生にフラッグフットボール¹⁾大会を開催させ、スポーツ大会の組織運営について教えることを目的とした実践研究である。この研究は、岐阜経済大学経営学部スポーツ経営学科の教職科目である、保健体育科教育法 IV (2 クラス・受講者合計 34 人) において取り組んだ。後述するように、スポーツ大会の組織運営に関する知識や経験は、スポーツ経営学科の学生や、保健体育教師をめざす学生に不可欠である。

スポーツ経営学科は、「経営学の諸分野とスポーツ科学を複合的に学び、21 世紀のスポーツ・教育・健康関連事業の発展に資することのできる人材の養成」を目的に設置された学科である。2009 年度からは教育目標をさらに具体化し、「地域においてスポーツイベントを企画・運営・実行できる人材」の育成をめざすようになった。すなわち、「地域の市民スポーツ大会、学校体育大会、国民体育大会、あるいは企業と協賛したスポーツイベントなどの運営に関するノウハウを持ち、それを実行、評価できる人材」を育成するのであり、そのような能力を持った者には「地域スポーツマネジャー」という大学独自の資格を与えることにした。だが、そのような人材を育成するためには、大学内の様々な講義の協力が不可欠であり、教職科目においても「地域スポーツマネジャー」に関わる内容は、できるだけ取り上げることにしている。

実際に、スポーツ大会の組織運営に関する知識や経験は、保健体育教師にとって不可欠である。中学校や高等学校の『学習指導要領』には、「教科」の他に、生徒会活動や学校行事などによって構成された「特別活動」の領域がある。各学校で行われている運動会や球技大会も「特別活動」に含まれた教育活動であり、その指導においてリーダーシップを発揮しなければならないのは保健体育教師である。つまり、保健体育教師は、授業と体育行事を指導できる総合力が求められているのである。そのことを示すように、古くは 1953 年の『小学校学習指導要領体育科編

(試案)』において、体育授業と体育行事を関連づけて実施する「行事単元」が推奨され、練習に関する話し合いや行事の自治的運営を通して、民主的な人間形成がめざされてきた²⁾。また、東京教育大学附属高等学校で保健体育の教師をしていた中村敏雄(1973)も、体育の授業において、技術とともにスポーツの「組織」について教えることをめざし、体育行事や部活動はその発展学習の場として位置づけられていた(神谷・高橋, 2006)。このような取り組みに倣い、近年においても体育授業、体育行事、運動部活動を関連づけた教育課程が編成され、それに基づく実践研究が行われている(小山, 2000, 2002a, b)。また、諸外国においても、体育行事につながる体育の授業モデルが見られる(ダリル・シーデントップ, 2003)。世界学校体育サミットにおいても、Bruce(1999, p.158)が「校内競技やクラブを含んだ強力な正課併行プログラム(co-curricular program)の確立」を主張し、それは「学校における学問的そして行動的な成功を強化するのである」と述べている。

このようにして、体育授業と体育行事を関連づける取り組みが重視されてきたのは、スポーツ(大会)の組織運営の知識や経験が、学校卒業後のスポーツライフに不可欠だからである。例えば、学校体育研究同志会(2003, p.186)は、スポーツの主人公に必要な教養を表1のように整理している。学校を卒業したら引率の教員はおらず、自分たちで大会に参加し、時には企画、運営にも関わらなければならない。そのため、「II. スポーツの組織性に関わる内容(領域)」において「競技会・発表会(大会)の企画と運営」の学習が位置づけられているのである。

2. 研究方法

本実践研究は、2008年度後期(2008年9月～2009年1月・全15時間)に行った。講義の1～8時間目までは、フラッグフットボール指導の系統性、戦術学習の指導理論、教師行動の在り方について解説し、これまで保健体育科教育法I～IIIで学習してきた内容のまとめを行った³⁾。9～10時間目(11月25日と12月2日)には、フラッグフットボール大会の開催に向けた話し合いを行い、その後の時間も学生がルールの確認をしたり、大会参加者に技術指導をするために用いた。そして、2009年1月10日(土)に大会(モーモーカップ2009)を開催し、最後の講義である1月13日に大会の総括を行った。なお、大会を開催するにあたって、学生に求めたことは以下の5つである。

- ① 100人を集める。
- ② 「管理権の委託リスト」をつくる(大会を開催するにあたって「何を決める必要があるのか」の解明)。
- ③ 誰もが楽しめるルールと当日のプログラムの内容を明らかにする。
- ④ フラッグフットボールを系統的に指導する。
- ⑤ 参加者にアンケートを実施するとともに反省会を行い、課題を明らかにする。

表1 内容の領域構成試案（学校体育研究同協会，2003）

<p>I スポーツの技術性に関わる内容（領域）</p> <p>1. 技術的内容 （運動技術，戦略・戦術の認識と技能習熟）</p> <p>① 運動の場（時間・空間＝対象的諸条件）および場の特性（媒質）に応じた身体コントロール</p> <p>② わざ，表現様式をもった身体コントロール</p> <p>③ 運動手段（道具）の特性に応じた身体コントロール</p> <p>④ ゲーム場面に応じたコンビネーションの構成（戦術）</p> <p>⑤ 試合・ゲーム・レースプラン（戦略）の構成</p> <p>2. 技術指導（技術学習）の系統性 （うまくなるには筋道があること）</p> <p>① 基礎技術の規定</p> <p>② 系統性とスモールステップ</p> <p>③ 指導（学習）と言語化</p> <p>3. パフォーマンス（できばえ）の分析方法 （技術・戦術分析）</p> <p>① パフォーマンスの観察方法</p> <p>② パフォーマンスの記録・記述の方法</p> <p>③ 結果の分析と総合（事実，原因，手だて）</p>	<p>II スポーツの組織性に関わる内容（領域）</p> <p>1. グループ（組織）づくり</p> <p>① グループピニングの方法</p> <p>② グループの機能（役割）分担</p> <p>③ グループミーティングの方法</p> <p>2. グループの戦略・プランづくり</p> <p>① グループ目標の立案</p> <p>② 試合・練習計画の立案</p> <p>③ 計画の評価と調整</p> <p>3. ルールづくり・ゲームづくり</p> <p>① ルールの基本原則の理解</p> <p>② ルールづくりの意味</p> <p>③ ルールの仕組み・内容</p> <p>④ ルールを守ること</p> <p>4. 競技会・発表会（大会）の企画と運営</p> <p>① 競技方式とその特徴</p> <p>② 競技会・発表会の企画</p> <p>③ 競技会・発表会の運営と管理</p> <p>5. スポーツ（表現作品）の評価と鑑賞</p> <p>① よいプレイ・よい試合とは何か</p> <p>② 技術美</p> <p>③ 作品づくりとしてのスポーツ表現の様式</p> <p>④ スポーツ批評</p>
<p>III スポーツの社会性に関わる内容（領域）</p> <p>（この領域は必ずしも理論学習で扱う必然性はない。実践学習に関連する内容として学習する場合もある。内容によっては理論でしか扱えないものもある。）</p> <p>1. 技術の社会・歴史的な性質と発展（「うまい」「へた」を社会歴史的に認識する）</p> <p>① スポーツ手段（道具）や対象（場）の変化と技術・戦術の変化</p> <p>② ルールと技術・戦術の関係（矛盾とその解決）</p> <p>③ 練習やトレーニング方法の科学的な研究と開発</p> <p>④ 技術・戦術を普及し発展させる組織の取り組み</p> <p>2. スポーツの発展史と発展論（運動文化の発展をどう捉えるのか）</p> <p>① 近代的な理念・様式の成立と発展</p> <p>② 文化の普及と変容や発展の様相（ローカリゼーションとグローバルゼーション）</p> <p>③ 人類の現代的な価値追求（平和，自由と平等，人権，環境など）とスポーツの理想や理念</p> <p>④ スポーツ振興法と政策・行財政の展開</p> <p>3. スポーツの主体の成立と形成（スポーツの主人公が担うこと）</p> <p>① 文化の担い手の拡大と組織化（クラブ，協会，連盟）</p> <p>② スポーツ組織の自治と自立（手段，ルール・規範，財政の管理運営）</p> <p>③ スポーツ権の生成と展開（理念，体系，法的根拠）</p> <p>④ 現代スポーツの社会問題を解決する主体の形成（様々な事例と主体形成の可能性）</p>	

①に関しては，通常，学校で行う体育行事は参加が強制されていることが多く，そのことを前提にして準備や指導が進められる。しかし，地域で行われるスポーツ大会では，参加者を自分たちで集めることもあり，それは前掲の「地域スポーツマネジャー」の資格取得をめざす学生にも必要な経験である。諸外国に目を向ければ，例えばアメリカで取り組まれている学校の体育行事プログラムである「イントラミューラル・スポーツ」では，より多くの参加者を集めるため，事前に全生徒へのアンケートが実施され，それに基づいて大会が企画，運営されている（Paul and

Robert, 2001, p.274)。日本においても、昼休みの時間などに行う自由参加の「ミニ・スポーツ行事」を生徒会が企画、運営し、「する」参加者だけでなく「見る」参加者も集めた実践がある(小山, 1997, 2002a, 2003)。このような動向をふまえれば、保健体育教師の育成という観点からも「参加者を集める」経験は必要であろう。そのため、本実践研究においては、1つの目安として「100人を集める」ことを学生に求めた。

②「管理権の委託リスト」の作成に関しては、教職科目の「特別活動の研究」との関連を意識している。これまで日本の教育実践では、学校行事の教育目標として自治集団形成が重視されてきた。つまり、子どもたち自身が集団を組織し、状況に応じた意志決定をしながら、様々な課題を解決することがめざされてきたのである。かつて、教科外教育論・生活指導論を専門とする城丸章夫(1962, p.85)は、その指導のモチーフを「管理権の委託」と表現した。これは、文字通り、教師が持っている管理権(物事を決めて、運営する権利)を徐々に委託していくことで、子どもの自治集団活動を発展させる考え方である。例えば、体育行事を運営するうえで、様々な準備や計画が必要であろう。お金を集める、会計報告書をつくる、当日のチーム分けをする、スケジュールを決める、などが挙げられる。教師は、これらの管理権を子どもの発達段階、学習状況、そして与えられている時間をふまえて、可能な限り委託していくのである。もちろん、子どもに自治の力が育っていない場合には、教師自身が企画、運営に関わらざるを得ないが、徐々に管理権を委託していきながら子ども自身が決定・行動する場面を増やさなければ、子どもに自治の力をつけることができない。だが、そのような指導を行うには、教師自身がスポーツ大会に関わる管理の内容に精通していなければならない。すなわち、スポーツ大会の企画、運営、評価の経験を積み、「何を決める必要があるのか」を事前に理解しておく必要がある。このような問題意識から、この実践研究では、フラッグフットボール大会の自治的運営を通して、大会の開催に必要な管理権の内容を明らかにするとともに、実際の教育現場で活用しうる「管理権の委託」リストの作成を学生に求めた。

③誰もが楽しめるルールと当日のプログラムの内容を明らかにすること、及び④フラッグフットボールを系統的に指導することに関しては、保健体育科教育法の学びを深める意図がある。上手い子と下手な子が共に学ぶ体育授業において、誰もが楽しめるルールについて考えることは日常に行われている。教師がスポーツ文化を「教材化」する過程で行われており、また、子ども自身にルールを考えさせたり、創造させる授業もある(前掲、表1「II. スポーツの組織性に関わる内容(領域)」参照)。系統的指導に関しても、これまでの保健体育科教育法の講義において重点的に学んできた内容であり、受講生がその知見を活かして初心者指導を行うことは、講義の理解を深める意味がある。

最後に、⑤参加者にアンケートを実施するとともに反省会を行い、課題を明らかにすることを求めた。通常、どのような営みにおいても総括を行わなければ、次の取り組みに発展していかない。しかし、学校行事においては、毎年、教員が移動する(指導する学年が変わる)ことが多いという事情もあり、総括を次の(次年度の)計画に活かすことが意識的に行われているとは言い難

い。例えば、次年度の修学旅行を意識した総括が行われたり、あるいは、昨年度の総括を参考にして自分たちで計画を立てるという作業は、あまり重視されていないのが実態である。体育行事も例年実施されていながら、「今年の体育行事は去年よりも盛り上がった」とか、「今年の体育行事は楽しかった」と感覚的に話されることが多い。この背景には、『学習指導要領』において学校行事に関わる時間が削減され、総括の時間が十分に確保できなくなったことがあり、また、実践レベルでも総括を意識した体育行事の研究が少なく、指導方法が十分に洗練されていないことが挙げられる⁴⁾。そこで、本実践研究では、大会の運営方法の継承と次年度の課題を明確にする総括を重視した。

その際、参考にしたのは神谷（2005）の取り組みである。彼は、看護専門学校（全3学年）の第2学年が取り組む野外活動実習において、実習の運営方法を継承させ、また、次年度の課題を明確にするために、『来年度実習生への手紙』という文集を学生につくらせた。そこには、キャンプディレクターをはじめとする各係の仕事や、草木染、オリエンテーリング、キャンプファイヤーの実施方法と楽しむポイント、そして、自分たちの失敗に基づくアドバイスが記されている。通常、学校行事が終了した後にレポートを書かせると、「…が楽しかった」という心情的な内容や、「…すれば良かった」という個人的な後悔の記述が多くなりがちである。しかし、この『文集』では、自分たちの失敗が次年度の課題として位置づけられ、「助言」的な内容が多くなり、未来志向の総括が行われている。そして、このような『手紙』があることによって、次年度の野外活動実習生はそれを参考にして活動計画を立て、同じ失敗を避けることができる。つまり『手紙』は、次年度の野外活動実習（自治集団活動）を励ます媒体になるのである。また、このような取り組みを積み重ねていくことで、野外活動実習の運営方法や自治は洗練されていき、歴史を重ねるとともに学校行事の質を高めていくことが期待できる。それは、学生自身が学校行事の「伝統」をつくっていく取り組みとも言えるだろう。さらに『手紙』は、自治集団活動を援助する「ゆとり」を教師に与える。先に述べたように、学校行事は単年度の活動として位置づけられ、失敗が許されないものと意識されがちである。特に入学式や卒業式は「儀式」化されており、その傾向が強い。そのような場では、教師の指導が前面に出すぎてしまい、子どもの自治集団活動ではなくなってしまうことが少なくない。しかし、教師が学校行事を「子どもが参加する歴史的な取り組み」として位置づけ、「今年度の失敗は、次年度以降の課題である」と考えることができれば、子どもの身に危険が及ばない限りは自治集団活動を見守り、援助する姿勢を保つことができる。そのような指導や活動を可能にするのが、神谷の『来年度実習生への手紙』に見られる総括の方法であり、本実践でも参考にした。

3. モーモーカップ 2009

2009年1月10日（土）に、岐阜経済大学サッカー場とラグビー場において、フラッグフット

表2 モーモー CUP 2009 フラッグフットボール ルール説明

1. 基本ルール

- ・1 チーム 5 人。4 人 + 1 人補欠。
- ・補欠の交代はハドル（作戦タイム）の間に、自由に行ってもよい。
- ・1 試合、攻撃・守備ともに 3 回ずつ行う。
- ・審判は空いているチームが行う。

2. 攻撃時のルール

- ・オフenseは、C（センター）・F（フォワード）・QB（クォーターバック）の各ポジションに分かれて行う。
- ・C が「セット、レディー、ゴー」の声をかけて、スナップバックパス（股下から QB へのパス）からスタート。
- ・1 番始めの攻撃は、ゴールラインの真ん中からスタートする。
- ・1 回目の攻撃が終了した後、次の攻撃の開始は攻撃を終了したラインの真ん中（中央）から始める。
- ・攻撃を開始する際、スクリーメージライン（プレー開始で攻撃側と守備側が向かい合う架空の線）を挟んで、両チームの間を 3 メートル開ける。
- ・ハドル（作戦タイム）は 45 秒。
- ・フォワードパス（前へのパス）は 1 回の攻撃につき 1 回のみ。
- ・バックパス（横や後ろへのパス）は何度でも可能。

※ 1 回の攻撃が終了する場合※

- ・ボールを保持している人がフラッグを取られた場合。
- ・ボールを落とした場合。
- ・ボールを相手（ディフェンス）にカットされた場合。
- ・ボールを保持している人がサイドラインを出た場合。
- ・スナップバックパスでボールを落とした場合。

3. 得点時のルール

- ・ボールを持ってゴールラインを走り抜ける。
- ・味方がボールを投げ、ゴールラインを越えてエンドゾーンでキャッチした場合。
- ・女子がゴール（タッチダウン）を決めた場合は得点を 2 倍にする。

4. 守備のルール

- ・相手チームが攻撃開始の際、守備側は攻撃チームと同じポジショニングで行う。
- ・タックルは禁止。

5. 攻守交代の場合

- ・ハーフラインまでに 3 回の攻撃でいけなかった場合。
- ・ハーフラインを越えて、3 回以内の攻撃でゴール（タッチダウン）できなかった場合。
- ・相手チームがゴール（タッチダウン）を決めた場合。

ボール大会・モーモーカップ 2009 が開催された（参加者 86 人〔受講生を含む〕）。当日に予定されていたスケジュールは以下の通りである。

- ・ 12:30……受付開始
- ・ 13:00……開会式
- ・ 13:20……練習（ルール確認、パス練習）
- ・ 14:00……ゲームスタート
- ・ 16:50……閉会式

また、当日のルールを示したのが表2（学生が作成）である。1チームを4～5人で編成し、合計で20チームをつくった。そして、5チームずつ4つのリーグに分かれて、総当たり形式で試合を行った。その後、各リーグの上位1, 2位による決勝トーナメントを開催し、順位を決定した（3, 4, 5位によるトーナメントも企画されていたが、時間がなくなったため中止となった）。実際の終了時刻は大幅に遅れ、全てを終了した時には18:00を回っていた。

4. 次年度へのアドバイス

最後の講義において、学生は大会の総括を行い、以下のように「管理権の委託」リスト（次年度へのアドバイス）をまとめた。

〈資料〉 2009年度のフラッグフットボール大会に向けて
——2008年度・保健体育科教育法4の受講生から、来年度受講生へのアドバイス——

〈人・役割に関わって〉

- ① リーダーを決めましたか？
- ② 100人を集めるために大会案内をする方法や人を決めましたか？
- ③ 役割分担を明確にしましたか？

今年の失敗 ⇒ a) 受講生の連絡網がまとまっていなかった。

b) 受講生の一部しか準備や後片づけをしていなかった。数人に負担がかかった。

来 年 へ ⇒ a) 連絡漏れ防止や当日の雨天決行等を早く知らせるためにも、1人がまとめて大会参加者全員に連絡できるようにする（*個人情報の管理は徹底する）。

b) 仕事を明確に、かつ分担してスムーズに行う。

〈大会運営・当日までの準備に関わって〉

- ④ 場所を決定しましたか？……モーモーカップ2009 → 岐阜経済大学サッカー場，ラグビー場（雨天時…岐阜経済大学体育館）。
- ⑤ 日程を決めましたか？……モーモーカップ2009 → 1月10日（土）。雨天時は11日（日）。

今年の失敗 ⇒ a) 1月上旬は寒すぎた。

b) 成人式と重なっていた。

来 年 へ ⇒ a) 開催時期をはやめる。

b) 行事と重ならないようにする。

□⑥ 時間を決めましたか？……モーモーカップ 2009 → 13 時～18 時。

□⑦ 100 人を集めるために必要な準備期間を設定していますか？

今年の失敗 ⇒ a) 当日に 100 人集まらなかった。

b) 当日のキャンセルが多かった。

来 年 へ ⇒ a) 人数集めはできるだけ早くから (1 月開催なら 10 月位から) 始める。

b) 事前にチーム編成をしておき、掲示板などに貼り出す方法 (案)。

□⑧ 参加者名簿をつくりましたか？ (保険適用のため。事前に教務課に提出)。

□⑨ 大会名を決めましたか？……今年度はモーモーカップ 2009 (丑年のため)。

(試合のルールや大会運営に関わって)

□⑩ 当日のルールを決めましたか？ (フラッグフットボールの基本ルールをつくりましたか？)

今年の失敗 ⇒ a) コートの大きさ 縦 40 m × 横 50 m では広すぎる。

(※雨天時に体育館で行っていたら、体育館ではコートが取れなかった)

b) ハドルの時間 (45 秒) が短い。

…… (参加者の FFB の理解力、技術力不足 [当日の練習時間だけでは不十分] でハドルの時間が有効利用できていない)

↓

簡単な作戦しか立てられず、足の速い選手 (ランプレー) だけで得点してしまう。

来 年 へ ⇒ a) 実際に自分たちでリハーサルをして (参加者がいれば効果的と考える)、丁度良い広さを決める。

b) 授業や授業以外でも練習ができればよいが、練習の時から参加者を集める工夫が必要。← 練習時間が増えると「スイッチ」の技術など、ゲームの内容を理解でき、FFB の本来の楽しさを伝えられる。

□⑪ 女子も参加しやすいチームのつくり方やルールを決めましたか？……モーモーカップ 2009 → 必ず女子を 1 人含むこと。含まない場合はルールハンディを設ける (みんなが楽しめるようなルールをつくる)。

今年の失敗 ⇒ a) 当日にくじ引きでチーム分けをしたため、能力の高い人ばかりが集まったチームもあった。

b) 女子の参加者が少ない。

来 年 へ ⇒ a) チーム編成をしっかりと計算する。← 事前に参加者のスポーツ経験の有無、ケガをしていないか等を確認しておく。

b) もっと女子が参加しやすいルールづくりなど。

□⑫ 必要な道具を準備しましたか？

今年の失敗 ⇒ a) 当日の練習が効果的に行えなかった (ボール、ホワイトボードの不足)。

試合がスムーズに行えない（フラッグの不足）。

来 年 へ ⇒ a) 事前に練習内容や試合進行の方法を決めておけば、スムーズに行える。

□⑬ 当日の試合数や試合時間を適切に設定しましたか？（試合時間のリハーサル、対戦表作成が必要）。

今年の失敗 ⇒ a) リーグ戦の試合数が多かったため、待ち時間が長かった。

b) 時間（分）ではなくセット数で試合の流れを決めていた……その結果、試合が全て行えない。

↓

当日の大幅なルール変更。

来 年 へ ⇒ a) 試合数を減らす（*運営方法が大切）。

b) 時間（分）で考え、無駄を省く。

〈当日のルール変更について〉

今年の失敗 ⇒ a) 攻撃回数を3回から2回に減らした（しかし、女子がゴールを決めたら2点というルールは変えなかった）。→ 女子有チーム VS 女子無チームの時に、最初に女子がゴールを決めたら、女子無チームが勝つことは不可能になってしまった。本来やるはずだった下位チームのトーナメントを中止にした。

b) トーナメント戦，リーグ内の順位決めの時，引き分けの場合の対処を考えていなかった（対応がその場しのぎで，バラバラだった）。

来 年 へ ⇒ a) ルール変更に伴う得点変更と下位チームへの対応。

……（主に，当日にルール変更をしないように考える）。

b) 引き分けの場合における勝敗の決め方を統一する（「じゃんけん」で統一するなど）。

〈その他の課題・アドバイス〉

1. 参加者のアンケートがとれなかったので，最後の総括が受講生の意見でしか行えなかった。自分達で総括を行いやすいように，参加者の意見を聞くアンケートが必要になる。
2. 3週間前から取り組んだので，準備不足が目立ってしまった。余裕を持って準備ができるようにしてほしい（最低でも1カ月は必要）。
3. 当日に初めてFFBをする参加者がいた。そのため，ルールを間違えている人や，理解していない人が多くいた。そうならないためにも，ルールを貼り出すなどの工夫が必要になる。
4. 大会当日と大会後に，ケガをした人や病院に行った人がいることがわかった。ケガをした時の対処や連絡方法を検討する必要がある（大学教員や事務への連絡も必要）。

5. 総 括

最後に、この実践研究で重視していた5つの視点から、この大会の課題を整理しておく。

① 100人を集めるという目標は達成されなかった。したがって、次年度はより多くの人を参加させることが課題となるが、そのために必要なことは前章で学生自身がまとめているため、ここでは繰り返さない。また、100人という人数を設定したのは、学生に「参加者を集める」経験をさせる意味があったが、当日は受講生(34人)の他に52人が参加しており、その目的は概ね達成できたと思われる。

② 「管理権の委託リスト」をつくること(大会を開催するにあたって「何を決める必要があるのか」の解明)については、前章で引用したように、学生の手によってリストがつけられた。このリストで示されたことは、中学生や高校生がスポーツ大会を企画、運営する時にも課題になることが予想され、指導の目安になるだろう。そして、子どもとリストの修正を積み重ねることによって、自治集団活動への理解が深まるとともに、体育行事の質を高めていくことが期待できる。さらには、このような形で、学校の自治集団活動において「子どもが自分自身で決める経験」を積み重ねていくことで、子どもの権利条約にある「意見表明権」を行使する力も形成されるのではないだろうか⁵⁾。

③ 誰もが楽しめるルールと当日のプログラムの内容に関しては、まず、大会運営に要する時間の見通しの甘さが問題として挙げられる。また、教師側の反省点としては、大会を準備する時間を十分に確保できなかったことがある。次年度は、話し合う時期を早めに設定することで、その問題を改善していきたい。

④ フラッグフットボールの系統的指導に関しても、学生の間で大会の準備と技術指導の役割分担が行われていたため、全員に取り組みさせることができなかった。しかし、これまで保健体育科教育法の講義で学んできた内容の理解を深めるためには、必ず全員が初心者指導に関わるようにする必要がある。

⑤ 参加者にアンケートを実施するとともに反省会を行い、課題を明らかにすることに関しては、アンケートを実施することができなかったものの、前章で示したように課題は明確にすることができた。このような形で、次年度の課題・助言を明確にした総括と、それを基盤にした大会の企画、運営というサイクルによって、岐阜経済大学のフラッグフットボール大会は、年を重ねるごとに洗練され、発展していくと考えられる。次年度は、さらに課題を明確にさせるために、参加者へのアンケートを実施するようにしたい。それには、前掲の課題とも関わるが、準備の時間を確保する必要がある。

この他にも、学生が述べているように、ボールやフラッグの数が足りないという課題や、病院に行った際の連絡方法など、教師・大学側の配慮が足りない点もあった。

このように、大会自体には多くの課題が残されたが、この実践研究の目的であった大会の組織運営に関する知識と、体育行事の指導方法を教えることに関しては、概ね達成できたと考える。次年度は、「管理権の委託リスト」がどのように継承され、また、つくり変えられるのかに注目していきたい。

〔注〕

- 1) フラッグフットボールを教材に選択した理由は、日本フラッグフットボール協会が自主的な大会開催（中学生以下）を積極的にサポートしており（日本フラッグフットボール協会ホームページ参照）、「行事単元」の実践を行う際に利用できる可能性が高いからである。
- 2) 「行事単元」の実践については、菊（1997a, b）、高橋（1997）、友添（1997）、中村（1997）の論稿が参考になる。
- 3) 本稿の目的は、大会の組織運営の学習及びその指導方法にあるため、1～8時間目までの内容は、稿を改めることにする（なお、実践の一部は、『たのしい体育・スポーツ』号外〔2009年度学校体育研究同志会全国大会提案集、pp.125-128〕に掲載されている）。
- 4) 総括を意識した体育行事実践は少ない状況であるが、広島大学附属高等学校における実践研究では、3年間を見通した特別活動の指導計画が立てられ、自治集団形成、行事の総括、そして課題の継承が重視されている（西本ら、2002）。しかし、本稿で重視している「子どもたちが『何を』決めてきたのか」、「それらを次年度の後輩にどのように伝えるのか」という視点からの分析や総括は行われていない。実践した西本らは、「[子どもの自治集団活動が…筆者] 教員側の仕掛けによって誘導されたものであるとすれば、果たしてそれは真の意味での『自主・自立』であったか」（同上、p.108）と反省しているが、そのような指導にならないためにも、子どもたちの手によって自治が引き継がれる仕組みや、その指導方法を解明する必要があるのではないだろうか。本実践研究で重視した「管理権の委託リスト」は、そのような問題意識から取り組んだものである。なお、体育行事実践の歴史的な変遷については、出原（1997a, b）に詳しい。また、近年の体育行事以外の実践研究については、2008年に刊行された『高校生活指導』（178）において、総括を重視した実践の特集が組まれている。
- 5) 喜多（2001、pp.86-87）は、子どもの権利条約にある「子どもの意見表明権（参加の権利）」をふまえ、学校の共同意志決定の参加主体として子どもを位置づけることを重視しているが、「残念ながら、今日の子どもの世代の権利行使のハードルは高い」と指摘している。そして、「参加を実質化していくためには、参加制度自体の改革以上に、その参加制度を支える人びとの意識の変革が不可欠である」と述べ、「川崎市子どもの権利に関する条例」において、「参加活動の拠点づくり」や、学校内における「子どもの自治集団活動の奨励」の規定があることを紹介している。筆者も、学校教育における自治的活動（意志決定）の積み重ねが、「意見表明権（参加の権利）」を行使できるようになるうえで不可欠であるという問題意識のもと、本実践研究に取り組んだことを付言しておく。

〔引用・参考文献〕

- ・ 出原泰明（1997a）民主体育時代の体育行事。中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究。創文企画、pp.325-342.
- ・ ———（1997b）体育行事の変質。中村敏雄編 戦後体育実践論 第2巻 独自性の追求。創文企画、pp.351-362.
- ・ 学校体育研究同志会教育課程自主編成プロジェクト（2003）教師と子どもが創る 体育・健康教育の教育課程試案 第1巻。創文企画。
- ・ 神谷 拓（2005）看護専門学校校の教育課程づくり。たのしい体育・スポーツ（号外・全国大会提案・研究集）、pp.250-255。及び、大会当日の配付資料。
- ・ ———・高橋健夫（2006）中村敏雄の運動部活動論の検討。体育科教育学研究 22(1): 1-14.
- ・ ———（2008）城丸章夫の運動部活動論。生活指導研究 (25): 72-95.

- ・ 神谷 拓 (2009) フラッグフットボールの「技術」と「大会の企画・運営」を指導するうえでの系統性. たのしい体育・スポーツ (号外, 全国大会提案集): 125-128.
- ・ 菊 幸一 (1997a) 神奈川大田小プランの特徴. 中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究. 創文企画, pp.109-122.
- ・ ——— (1997b) 竹之下のグループ学習論とその実践. 中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究. 創文企画, pp.247-260.
- ・ 喜多明人 (2001) 子どもの参加の権利の視点から. 学力問題と教育政策 日本教育政策学会年報 (8), 八月書館, pp.80-90.
- ・ 小山吉明 (1997) —— 昼休み企画 —— 春の運動会シリーズ. たのしい体育・スポーツ (87): 42.
- ・ ——— (2000) みんなのスポーツについて考える. 出原泰明編 教室でする体育 中学校編. 創文企画, pp.109-126.
- ・ ——— (2002a) 三本柱としての体育授業, 生徒会, 部活. たのしい体育・スポーツ (140): 8-13.
- ・ ——— (2002b) 学校体育研究同志会総会発表資料. 出原泰明 異質協同の学び 体育からの発信. 創文企画, pp.248-249.
- ・ ——— (2003) ミニ行事の日常化で学校生活に潤いを. たのしい体育・スポーツ (159): 6-7.
- ・ 城丸章夫 (1962) 集団主義と教科外活動. 明治図書.
- ・ 全国高校生活指導研究協議会 (2008) 高校生活指導 (178).
- ・ 全日本フラッグフットボール協会 (2005) 子どもが育つ フラッグフットボール. 学習研究社.
- ・ 高橋健夫 (1997) 浦和の体育研究. 中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究. 創文企画, pp.123-139.
- ・ ダリル・シーデントップ [高橋健夫監訳] (2003) 新しい体育授業の創造 —— スポーツ教育の実践モデル ——. 大修館.
- ・ 友添秀則 (1997) B型学習論の背景. 中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究. 創文企画, pp.229-246.
- ・ 中村敏雄 (1973) 運動文化と人間形成 (III). 日本体育学会編 日本体育学会第24回大会号: 3.
- ・ ——— (1997) 丹下のグループ学習論. 中村敏雄編 戦後体育実践論 第1巻 民主体育の探究. 創文企画, pp.261-278.
- ・ 西本 眞・西原利典・井上芳文・内海良一・大隈教臣・由利直子 (2002) 高等学校における3年間を見通した特別活動の展開: 自主活動を中心に据えた活力ある集団づくりの試み. 広島大学附属中・高等学校研究紀要 (49): 93-108.
- ・ 日本フラッグフットボール協会ホームページ. <http://www.japanflag.org/flaggames.htm> (2009年8月10日現在)
- ・ 文部省 (1953) 小学校学習指導要領体育科編 (試案).
- ・ Bruce Kidd (1999) 体育の経済的根拠 (仲澤眞訳). 日本体育学会 学校体育問題検討特別委員会監訳 世界学校体育サミット —— 優れた教科「体育」の創造をめざして ——. 杏林書院, pp.147-164.
- ・ Paul W. Darst and Robert P. Pangrazi (2001) *Dinamic Physical Education For Secondry School Students*. Benjamin Cummings, pp.271-285.